

日本語における無活用動詞の形態・統語的特徴をめぐって*

袁建華**

要旨：本稿は「無活用動詞」の内包と外延を見直した上で、特に無活用動詞の形態・統語的特徴を取り上げ検討したものである。無活用動詞とは、形態的に無活用であって統語的に単独で述語になれる一群の動詞を指す。無活用動詞は、①テンス・アスペクト・モダリティを表すことができる、②条件付きでヴォイスを示すこともできる、③肯否・丁寧さの対立を見せないといった文法カテゴリーにおける諸特徴を有する。また、表現上簡潔性の要求される書き言葉のみならず、伝達・発話モダリティの顕在する話し言葉においてもよく使用されるのが特徴的である。

キーワード：無活用動詞；形態・統語的特徴；文法カテゴリー；表現上の特色

1. はじめに

膠着語的な日本語の特徴の一つは、活用——動詞・形容詞などは述語を形成する際その機能に応じて形を変えること——を有することが挙げられる。固有語の和語は述語として使用される場合、活用することが普通であろうが、借用語の漢語動詞や洋語動詞はどうなっているか。下記の例(1)(2)を見てみよう。

(1) 政府は建設予定地の選定を学識者らでつくる委員会に諮問。

(共同通信社・西日本新聞社 2001 『西日本新聞・朝刊』 2001/11/17) ¹

(2) 十三回打席に立ち、十二打数 6 安打と格の違いを見せつけたこの日のイチローは、第 1 打席でセーフティをテスト。

(実著者不明 2001 『Ichiro セーフコ・フィールド物語』)

* 本稿は 2020 年度天津市教委科研計画プロジェクト“基于数据库的现代日语高频汉字词兼类用法实证研究”[課題番号：2020SK071]の段階的成果である。

** 袁建華：天津外国語大学日語学院講師、高級翻訳学院 MTI (Master of Translation and Interpreting) 指導教員、日本学術振興会外国人特別研究員、日本関西大学外国人特別研究員；研究分野は日本語学、中日対照言語学、コーパス翻訳学。

¹ 本稿における用例は特に断っておかない場合、いずれも『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)より抽出したものである。検索ツールは中納言(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>)を利用している。

例(1)(2)における「～に諮問」「～をテスト」は、連用格を支配しそのまま述語機能を果たしているため、名詞と見るのが明らかに不適当で動詞と見なければならぬ²。例(1)(2)における「諮問」や「テスト」は、本稿では「無活用動詞」と仮称する。「無活用動詞」という概念は、松下大三郎が『標準日本文法』(1924)³によってはじめて提出されたものである。膠着語的な日本語にとって奇異な存在であるせいか、大きな反響を起こしていなかった。しかし、無活用動詞は実際の使用文脈によっては高頻度に使うこともあり、検討する価値が十分あると思われる。よって、本稿は無活用動詞を取り上げ、その形態・統語的特徴を究明しようとする。第2節では、無活用動詞に関する先行研究を概観し、本稿の立場を明らかにする。第3節では、無活用動詞の下位類を手がかりに、いわゆる「動名詞」との関係を一層明瞭にさせた上に、その形態・文法カテゴリーにおける特徴と表現上の特色を全面的に記述する。最後の第4節では、本稿のまとめをし、今後の課題を提示しておく。

2. 先行研究の検討と本稿の立場

無活用動詞を考察の中心に据えた論考は少ないのが現状である。その中、無活用動詞を漢語動詞の語幹用法として触れた程度のもは少なくない。以下では、従来の研究を概観し、本稿の立場を明確にする。

2.1 先行研究の概観

「無活用動詞」に関する先行研究は、主に松下(1924, 1978)、山田(1940, 1958)、宮田(2009)、鈴木(1972, 1984)、松井(1987)、邱根成(1995, 2015)、石立珣(2016)が挙げられる。松下と邱根成は「無活用動詞」、山田は「動詞素」、宮田は「動詞基」、鈴木と松井は「動詞語幹」、石立珣は「動名詞の名詞形」、といったようにそれぞれ違う用語が使用されている。無論、範囲もそれぞれ微妙に異なる。その中、邱根成(1995, 2015)は松下の用語を継承し、比較的詳細に検討したものである。動詞素、動詞基、動詞語幹などの用語は単語以下(形態素)の単位と理解しがちなため、本稿は「無活用動詞」という用語を使うことにした。無活用動詞とは、字面通りに活用の無い動詞を指し、言語単位のレベルから見れば単語である。

² 村木(2012: 127-128)では、例(1)(2)の「諮問」「テスト」のような単語の特徴は、①語彙的意味がある、②補語として機能していない、規定成分をうけない、③述語として機能している、(連用)補語をうける、といった3つが挙げられている。また、②は名詞の統語的な特徴を持たないことを意味し、③は動詞の統語的な特徴を備えていることを表し、これらは名詞ではなく、動詞と見なさなければならないと指摘されている。ただし、村木は、「諮問」を「諮問s」という語幹から「-s」が脱落した「諮問する」の1語形と見なす立場である。それに対して、本稿は、例(1)における「諮問」のようなものを無活用動詞と見なす立場を取り、それ自体が単語の一語形ではなく語彙素であると考えている。

³ 『標準日本文法』(1924)の改訂版は『改選標準日本文法』(1928)である。本稿における松下からの引用は、いずれも『改選標準日本文法』(1978)の改訂再版による。

2.1.1 概念提出段階の研究

松下(1978:202)は日本語の「動詞は凡て活用が有ると思つてはいけない」と述べられており、日本語における無活用動詞の概念が提出されている。また、松下(1978)は無活用動詞は色々あり、「研究」「賛成」「そよそよ」「行きつ戻りつ」といったようにバラエティに富んでいると指摘されている。

山田(1940、1958)は、借用語のもととなる言語の本義により体言素・動詞素・形容詞素・副詞素に分けている。その中、「動詞素」は「する」を付けて「学問を研究す」のように、「補格」(対格)の語を伴うことができる。また、「神戸より乗船の際に」「散歩に出かく」といったように、「準体言」または「目的準体言」と同じ取り扱いを受けることもあると論述されている。

宮田(2009:103-105)は、「注意する」「賛成する」「はっきりする」「びっくりする」⁴のような動詞的表現の第一の要素を動詞基名詞と呼び、「動詞基」と略すと述べられている。宮田の動詞基の範囲は松下の無活用動詞とだいぶ重なっていることに注意されたい。宮田は外国語の動詞を借用語として取り入れる場合、普通の動詞即ち活用動詞として取り入れるのではなく、必ず動詞基として取り入れるとも指摘されている。この点については山田に似通っている。

2.1.2 考察展開段階の研究

概念提出段階の研究は主に現象指摘に止まっているのに対して、その後の研究は使用上の特徴も視野に入れている。鈴木(1972、1984)と松井(1987)は、いずれも動詞の語幹⁵用法と見なしている。前者は「収拾案を拒否」や「調停書にサイン」のように漢語・外来語⁶サ変動詞は語幹と語尾との結合が緩く、語幹単独で格助辞を支配できると指摘されている。また、活用語尾

⁴ 宮田(2009)の用例はいずれもローマ字で書かれているが、引用の際、漢字仮名交じり文に転換した。以下、同様。

⁵ 「語幹」は語形成(word building)にも語形形成(inflexion)にも使われる曖昧な用語である。例えば、影山(1993:15-20)において語形成の単位として、語幹を「stem」の訳語として使われており、語根(root)より大きい単語(word)より小さい単位と見なされている。それに対して、影山(1993:264)では、『愛する』の語幹はai-ではなくais-であると述べている。後者の「語幹」は、明らかに語形形成を説明するのに用いられる用語である。つまり、活用語(変化詞)が活用を行うとき変わらない部分を指す。語形成における「語幹」は語彙的な形態素であるが、語形形成における「語幹」は文法的な形態素である。同じ用語が質的に異なる意味を表すのが紛らわしいので、本稿における「語幹」は、専ら後者の意味で使われるが、鈴木と松井の「語幹」は明らかに語彙的な形態素である。

⁶ 「外来語」は、欧米系の諸語からの借用語を指す場合と借用語全般を指す場合とがあり、二義性を有する曖昧な用語である。前者を「狭義の外来語」、後者を「広義の外来語」と呼び分けることができる。筆者は、学術用語がなるべく曖昧性を無くす方が好ましいと考えているため、本稿では前者を「洋語」、後者を「借用語」と呼び、「外来語」を使わないことにしている。ここでの「外来語」は〈狭義の外来語＝洋語〉を指す。

を持たないこの種の動詞は、新聞記事や履歴書・日記・手記・スローガンなどのような簡潔性が求められる、好まれるものに多用されると指摘されている。文脈を借りて中止・完了・進行継続態を、更に命令・願望・勧誘・疑問などの主体的意思を表すことができるとされている。

一方、松井（1987）は、「亀井氏は一平が啾連師に紹介の労をとった」における「紹介」は、上の格助辞「に」を支配しているので動詞的性格を持つ一方、下に連体助辞「の」が接続しているので名詞的性格を有すると指摘されている。また、語幹動詞は中止法・終止法の他に、命令用法・挨拶語としての感動詞的用法・応答用法・補助動詞としての用法もあると記述されている。語幹動詞の表現性として、簡潔性あり、漢語の非和語的性格を利用し中止法の重複と感じさせないと指摘されている。

邱根成（1995、2015）⁷は、無活用動詞を独自に範囲を定め、体系的に検討したものである。形態から見れば、語幹独立型（cf. 資金を工面）と接辞合成型（cf. 輸入を連合国に懇請中）に分かれると述べられている。また、文中の機能により、完結型と未完結型に分けている。未完結型は更に①連体修飾型、②連用修飾型、③「だ」述語型、④連語型、に分けられている。

石立珣（2016）は無活用動詞を中心テーマに検討するものではないが、結果的に邱（2015）の未完結型の下位類である連体修飾型を、更に①N₂が時間的要素である場合「N₁格助詞 VN+N_時 間的要素」、②N₂が潜在時制を有する名詞である場合「N₁格助詞 VN+N_{潜在時制}」、③特殊なVNの場合「N₁格助詞 VN_{特殊}+N₂」、④場所依存型の「N₁格助詞 VN+N₂」、といった4種に分けられている。

2.2 先行研究の問題点

上述の通り、先行研究は様々な呼び名でまちまちな範囲を以て関連言語事実を観察してきた。換言すれば、「無活用動詞」という概念について、いまだに共通した認識に達していないのである。しかし、無活用動詞が考察対象である以上、明確な定義を下さなければならない。先行研究をまとめてみると、下記の表1の示す通りである。

表1. 先行研究における名称と範囲

先行研究名	名 称	範 囲
松下（1924、1978）	無活用動詞	「研究」のような二字漢語をはじめ、「行きつ戻りつ」「そよそよ」「一年」「行幸」「御教え」などバラエティに富んでいる。
山田（1940、1958）	動詞素	「する」と結合し漢語動詞（二字以上）を形成する漢語の部分
宮田（2009）	動詞基	①「注意（する）」のような名詞に由来するもの、 ②「はっきり（する）」のような描写詞に由来す

⁷ 以下では、比較的新しい邱根成（2015）を代表として紹介していく。

		るもの、③「歩きは(も/さえ)する」のような表現における動詞の原形 ⁸ 、④「立ったり座ったりする」というような表現における「立ったり座ったり」のような動詞基的な句
鈴木(1972、1984)	動詞の語幹	①漢語動詞(二字以上)の語幹、②洋語動詞の語幹
松井(1987)	動詞の語幹	漢語動詞(二字以上)の語幹
邱根成(1995、2015)	無活用動詞	漢語動詞(二字以上)の語幹・連用形・「語幹ダ」、和語動詞連用形・連用形を含む連語形式
石立珣(2016)	動名詞の名詞形	語種を問わず、「する」を伴わない動名詞の名詞形

表1を見て分かるように、先行研究における範囲が最も狭い松井(1987)から最も広い松下(1924、1978)まで様々であるが、漢語動詞(二字以上)の語幹(正確には、「用言類複合字音語基」)を含むという点で共通している。なぜかという、松下(1978:202)でも述べたように、「研究」「入学」などの「二字偶用の連辞より成るもの即ち字音動詞」が「最も代表的なもの」であるからであろう。つまり、二字以上の漢語動詞の語幹については研究者が合意に達している。先行研究はいずれも「無活用動詞」における「無活用」という形態的特徴に注目しすぎているが、しかし、「無活用」はただ「動詞」を修飾しているだけで、その本質を「動詞」に帰着させるべきであろう。村木(2012)によると、動詞の一次的な機能は「述語になる」ことである。松下(1924、1978)、宮田(2009)や邱(1995、2015)の中の「わんわん」「はっきり」のようなオノマトペ(描写詞)、「一年(は/もする)」「五円(は/もする)」のような時間・金額を表すもの、「行きつ戻りつ(する)」「行ったり戻ったり(する)」のような句は、動詞でもないし、それ自体で述語にもなれないため、無活用動詞から除外しなければならぬ。

2.3 本稿の立場——無活用動詞の再規定

2.1と2.2では、先行研究の基本的な問題点——「無活用動詞」の定義・範囲が曖昧であること、用語の規定が厳密でないこと——を指摘してきた。ここでは、以上の問題点を踏まえ、本稿の立場を示しておきたい。「無活用動詞」は、①まず、形態的特徴として「無活用(活用がない)」という点が挙げられる。②次に、「動詞」であることを忘れてはならない。ほとんどの先行研究は無活用という形態的特徴に注目しすぎているせいか、最も本質的な動詞であることを見逃している。

1点目の「無活用」という形態的特徴を論じる前に、「活用」とは何かを断っておかなければ

⁸ 宮田(2009)の「動詞の原形」は、動詞連用形のことを指す。

ならない。活用とは、動詞や形容詞などの用言、文の成分としての述語になるという機能に基づいた語形変化の体系を指す。例えば、下記の例(3)を見てみよう。

- (3) a. それをフロッピーに入れて役者に送ると、役者はそれを見て役づくりを研究する。
(篠田正浩 1995『日本語の語法で撮りたい』)
- b. 一九四三年(昭和十八年)にはしきりに日本画を描き、中国画を研究した。
(飯島耕一 2001『飯島耕一・詩と散文』)
- c. 心理学はこのような問いかけをもとに、人間の心理と行動について研究している。
(齊藤勇 2005『図説心理学入門』)
- d. 植木屋にそれを言うと、彼は、造り方を知っていますと言うので、それ以上は研究しないことにした。
(山口瞳 1989『男性自身卑怯者の弁』)
- e. 実戦はAでしたが、Bについて研究します。
(趙治勲 1998『シノギの達人』)
- f. ボランティア活動が盛んになった今日においては、ボランティア精神を尊重し、選考基準をより柔軟に適用する、また、日本語教員への道をより大きくするなどして参加者を増やす方途が研究されることが望ましい。
(実著者不明 2001『地方自治体の国際協力』)
- g. この観察に刺激されて、私はこれをもっと綿密に研究しようと思いました。
(上田誠也ほか 2006『理科基礎 自然のすがた・科学の見かた』)

上記の例(3a)と例(3b)の対立は、「研究する」vs「研究した」で〈テンス〉における対立、例(3a)と例(3c)の対立は、「研究する」vs「研究している」で〈アスペクト〉における対立、例(3a)と例(3d)の対立は、「研究する」vs「研究しない」で〈認め方(肯否)〉における対立、例(3a)と例(3e)の対立は、「研究する」vs「研究します」で〈丁寧さ〉における対立、例(3a)と例(3f)の対立は、「研究する」vs「研究される」で〈ヴォイス〉における対立、例(3a)と例(3g)の対立は、「研究する」vs「研究しよう」で〈モダリティ〉における対立、である。普通、例(3a)のような付加的な形態を伴わない基本的な形式を無標形式という。それに対して、例(3b)(3c)(3d)(3e)(3f)(3g)のような何等かの付加的な形態を伴う形式を有標形式という。無標形式は一つの語形で様々な語形と対立しながら、様々な文法的意味を示すことができる。無活用動詞は、膠着語的な日本語と相性が悪いため、活用のある一般動詞のようにすべての文法的意味を自由に表すことができないのである。示せる文法的意味もあれば、どうしても表出できない文法的意味もある。

2点目は、「動詞」でなければならないということである。前節の論述から見て分かるように、多くの先行研究は、「無変化」という条件に注目しすぎたせいや、性質が全く違うものが混じったりしている。村木(2012)によると、動詞の文中における機能は、以下のようにまとめられる。

(4) 一次的な機能：述語になる

二次的な機能：修飾成分・規定成分・状況成分（・主語・補語）になる

動詞の一次的な機能は「述語になる」ことである。よって、無活用動詞であるか否かは、それ自体で述語になれるか否かによるところが大きい。この基準に従えば、先行研究の広狭様々な範囲を、例(1)(2)における「諮問」「テスト」のような「する」を付けて複合サ変動詞になる漢語・洋語に限定させることが適切であろう。「諮問」のような漢語も、「テスト」のような洋語も、同じ借用語であるという点において共通している。山田(1940, 1958)、池上(1954)、浜田(1963)などで述べたように、借用語が日本語に取り入れられた当初、原義の如何に関わらず、体言性が強いとされている。日本語化が進んでいくとともに、動詞・形容詞・副詞など他品詞としても使われるようになる。無活用動詞の存在は、漢語・洋語の日本語化の度合いのみならず、借用元の言語の特質との関係も緊密であるように見える。本稿は、無活用動詞を量的に極めて優勢を有する漢語に絞って考察を行う。したがって、本稿で取り扱う無活用動詞は、下記の条件を満たすものとなる。

(5) 無活用動詞＝用言類複合字音語基（自立形式）が単独で構成される動詞

形態的特徴：無活用

統語的機能：単独で述語になる（・規定成分になる）

「規定成分になる」に括弧を付けたのは、名詞を修飾する場合、無活用動詞単独ではできず、助辞「の」の力を借りなければならないからである。これは別に無活用動詞が名詞に転成するというわけではなく、借用語である漢語の性質によるものと考えられる。森岡(1994: 201)は、「漢語・外来語の出所はもともと外国語であり、外国語というのは、日本語にとっては非文法的であるというより、むしろ日本語文法とは異質である点で、無文法とでもいうべき性質のものである」と指摘されている。漢語の後ろに何かの成分が付いてくる場合、普通「の」で繋がる。しかし、伝統的な国語文法の中では、「の」を「連体格助詞」といい、上の体言とともに下の体言を修飾するとき使用されるものを指す。つまり、「の」の前の単語は、名詞扱いされがちである。それ故に、「真紅の花」における「真紅」のような、村木(2012)が「第三形容詞」と提案される一類が長い間名詞扱いされていた。ここの「の」も、同様にいわゆる「連体格助詞」ではないと思われる。ただし、この「の」の位置付けについては、現段階では筆者が断言できないのである。その他、活用の有る一般動詞は、下記の例(6)～(9)の示すように、修飾成分・状況成分・

主語・補語⁹にもなる。

- (6) 母は あわてて 部屋を かたづけた。 (村木〈2012: 55〉)
- (7) けさ ねぼうして 学校におくれた。 (高橋ほか〈2005: 13〉)
- (8) しかし、たとえ二千五百年に一人であっても、その一人が出ることは、人類全体にとって大変な喜びです。 (大川隆法 1997『釈迦の本心』)
- (9) そしてまたこのことが私が革命家になることを阻んでいるのだ。
(アンドレ・ジッド著／新庄嘉章訳 2003『ジッドの日記』)

上記の例 (6) (7) の示すように、普通動詞が修飾成分・状況成分をなすには、テ形が必要である。また、動詞が主語・補語になるには、例 (8) (9) の示す通り、「(出る) こと」「(なる) こと」のような名詞化の手続きを必要とする。上述した条件は、無活用動詞がいずれも満たすことができない¹⁰。したがって、統語的機能から見れば、活用のある一般動詞に比べて限られている。

3. 無活用動詞の形態・統語的特徴

前節では、無活用動詞の内包と外延を筆者なりに規定した。鈴木 (1984: 24) では、「ある物事・事柄の特質というのは、その物事・事柄のもっている性質を、同類の他の物事・事柄と比較することによって明らかになった特徴の分布として考えるべきこと」と述べられている。よって、本節では、活用の有る一般動詞と対照しながら、形態的特徴・文法カテゴリー・表現上の特色といった3点において、無活用動詞の形態・統語的特徴を考察してみる。

3.1 形態的特徴

単語は、語彙的な意味を持つとともに、文法的な意味・機能を持ち、それを表し分けるために単語の形を変える。こういった形を変えることを語形変化といい、文法的な意味・機能の相違によって作り出された形式を語形という。「語形」は語彙論にも形態論にも常用される、曖昧性を有する用語である。本稿でいう「語形」は形態論における「語形」であることに注意されたい。日本語の用言(動詞・形容詞)は、文中の他の要素との関係や文法的な意味を表し分けるために、単語の中心的な部分を担う語幹に語尾をつけることによって、様々な語形を作り出すことがで

⁹ 修飾成分とは、「述語があらわす属性の〈内的特徴〉(様子、程度、量)をくわしくする副次的な文の部分である」(村木 2012: 54)。状況成分とは、「述語と主語(補語・修飾成分・規定成分)からなる〈事象〉全体をとりまく〈外的状況〉(時間、場所、原因、目的、場面)をあらわす任意的な文の成分である」(村木 2012: 56)。主語は「述語によって述べられる物事をさししめす」(村木 2012: 54)のに対して、補語は「述語があらわす属性に必要な〈対象〉をおぎなう文の部分である」(村木 2012: 54)。

¹⁰ 無論、無活用動詞を構成する語基は体言類を兼ねた場合は、単独で主語や補語にもなれる。用言類複合字音語基の下位分類についての詳細は、斎藤 (2016) を参照されたい。

きる。つまり、活用を有する。活用によって作り出されるそれぞれの語形を活用形という。活用形は終止法として使われるものと接続法として使われるものに分かれる。日本語文法記述文法会編(2010: 86-87)によると、動詞の活用形は下記の通りである。

表 2. 動詞の活用形

動詞の終止法				動詞の接続法					
断定形		命令形	意志形	連体形		中止形		条件形	
非過 去形	過去形	投げろ	投げよ う	非過 去形	過去形	連用形	テ形	バ形	タラ形
投げる	投げた			投げる	投げた	投げ	投げて	投げれば	投げたら

表 2 の示す通り、和語動詞は語幹と語尾が融合的であり、様々な活用形を有する。しかしながら、松下(1924、1978)の指摘によると、活用は動詞の必要条件ではない。本稿で言う「無活用動詞」は、正にその名称の示す通り、活用のない動詞である。断定形と中止形はそのままの形で表すことができる。ただし、連用形とテ形を表し分けることができない上、述語の性格を失う中止形を表すこともできない¹¹。他の活用形の表す意味も特定の文法的手段を借りれば、部分的に成り立つが、断定形と連体形のテンス的分化は形態的に表すことができないため、文脈に頼るしかない。

- (10) a. ジョレス・メドページェフ博士、七十歳。農業大学を卒業した後、放射線医学研究所で遺伝学を研究。ソビエト連邦の官僚主義に激しく抵抗したため弾圧を受け、千九百七十三年にイギリスに渡った反体制科学者である。千九百五十七年、ソビエトの核秘密都市チェリャビンスクにある核施設マヤークで、核廃棄物が爆発する大事故があった(詳細は本書第四章を参照)。

(杉浦俊太郎/渥美哲 1996『地球核汚染』)

- b. (平成二十一年2月)入賞者はネガ又はデジタルデータを提出のこと。

(『広報「町から町へ」』2008年12号)

- c. 「以後君とは絶交だ。一切口を利かないから、そのつもりでいてくれ」君がまた答えた。

(丹羽文雄 2004『友を偲ぶ』)

- d. なお、団体での観察を希望の方は、なるべく事前に緑と公園課にお申し込みくださ

¹¹ 高橋ほか(2005: 128-130)の指摘によると、動詞の中止形は大きく述語の性格を失わない中止形と述語性を失う中止形に分かれる。前者は、1つの文の中に2つ以上の述語を並べるとき、文末述語でない述語であることを示す。後者は先行句節全体がひとかたまりになって、従属句節に様変わりすることになる。

- い。 (『市報きよせ』2008年06号)
- e. 防衛庁は他省庁所管の法令を研究、その中間報告をおこなった。
 (山崎静雄 1997『こわい新「ガイドライン」(新日米防衛協力の指針)の話』)
- f. げんに、『新宗教教団・人物事典』を作成のときは、資料の公開をめぐって、裁判沙汰にすることをちらつかせながら、クレームをつけてきた教団があった。
 (井上順孝・柘植光 1999『村上春樹スタディーズ』)

上記の例(10a)～(10f)の下線部は、格助辞ヲ・トを支配しているので、明らかに動詞である。その中、例(10a)における「研究」は、単独で断定形をなし文脈の助けによると、一般動詞の「研究していた」に変更できる。また、例(10a)の「参照」は、「本書の第四章を参照してほしい」という意味を表し、例(10b)の「提出のこと」と同様に相手に働きかける表現になり、命令形の示す意味と共通している。例(10c)における「絶交だ」という「無活用動詞+だ」構造¹²は、話し手の強い意志を表し、意志形の示す意味と部分的に重なっている。例(10d)の「希望」は、「希望の」の形で連体修飾をなしている。例(10e)における「研究」は、後ろの「おこなった」と共同で文の述語をなし、且つ文末述語「おこなった」のテンス・モダリティ情報を継承している。例(10f)は「げんに、～を作成したら……」に変更でき¹³、ここでは既定条件を表し、条件形の一部の意味を表すことができる。

無活用動詞が活用を有さないという点では、活用のある一般動詞とは大いに異なる。筆者は、「無活用動詞」という名称を選択したのもこの点を重要視するからである。しかしながら、以上の分析から分かるように、無活用動詞が活用を持っていないにもかかわらず、一般動詞の活用形の示す文法的意味を全く表すことができないわけでもなく、前後の文脈や他の形態・文法的手段の助けによって部分的でありつつも表すことができる。詳細は次節で見よう。

3.2 文法カテゴリーにおける特徴

文法カテゴリーとは、いくつかの文法的意味を一つにまとめて共通する文法的意味である。ここでいう「文法的意味」は、単語の有する、他の単語との結びつきのあり方や文の意味内容を形成するための抽象的な意味を指す。文法カテゴリーには、ヴォイス・アスペクト・肯否・テンス・モダリティ・格・主題・取り立てなどが挙げられる。すべての品詞が同じ程度に文法カテゴリーを持つわけではない。ヴォイスとアスペクトは動詞独自の文法カテゴリーである。格・主題・取り立てといった文法カテゴリーは、名詞が典型的に持つものである。

¹² この「無活用動詞+だ」構造についての関連研究は鈴木(2010, 2011, 2012)、佐藤(2011, 2012)、田中(2012)、久保田(2013)、石立珣(2016)などが挙げられる。なお、当該構造が本稿における無活用動詞との相関関係を検討する余地があるが、本稿の趣旨とは多少ずれているため、ここでは深入りしない。

¹³ ここでの言い換えは、すべて日本語母語話者に確認済みである。

普通各文法カテゴリーの表示は、語形変化を伴わなければならない。無活用動詞が文法的意味に応じて活用できないため、活用の有る一般動詞に比べれば、表せる文法カテゴリーが限られている。つまり、無活用動詞で表しやすい文法カテゴリーもあれば、表しにくい文法カテゴリーもある。結論を先に言えば、以下の通りである。①テンス・アスペクト・モダリティを表すことができる、②限られているがヴォイスを表すこともある、③肯否・丁寧さの対立が見られない。ただし、表せる文法カテゴリーであっても、前後の文脈の助けで誤解を招きにくい場合に限られる。仁田(1991:19-20)によると、モダリティは言表事態めあてのモダリティと発話・伝達のモダリティに分かれており、且つ両者とも文にとって必須である¹⁴。本稿は仁田(1991)と同じ立場を取る。つまり、モダリティは文成立の必須条件と見なされている。したがって、無活用動詞述語文も例外ではなく、モダリティを有さなければならない。先行研究では、例えば松井(1987)、邱(2015)など、例示された無活用動詞が活用のある一般動詞のどの活用形に対応しているかを列挙したが、文法カテゴリーまで一般化されていない。以下では、例¹⁵を挙げながら、解説を行っていく。

- (11) 「海の健康診断調査」として、広島県大野町の鳴川海岸、防府市の富海海岸など中国地方の八カ所を含む計十八カ所で、ごみの内訳を調査。たばこのフィルターやペットボトルなどプラスチック類が53.3%で最も多く、発泡スチロール(11.1%)、空き缶など金属類(10.2%)も目立った。(中国新聞社2004.11.09『中国新聞・朝刊』)
- (12) ウイルスのタイプ別では、例年は2~3月に流行するB型に感染する人が最も多く、2009年に新型として流行したA型のH1N1とともに同時に流行。また、A香港型の割合も前週より増えてきている。(朝日新聞社2018.02.02『朝日新聞・朝刊』)¹⁶
- (13) a. 「ママちゃん、目じりにしわができてるよ。カラスの足あと。」とやってやると、「やな子ね。こんなのはまだ、スズメの足あと。かわいいものよ。だけど、チー子がちゃんと勉強してくれないと、カラスの足あとどころか、だちょうの足あとになっちゃうよ。さあ、勉強、勉強。」と、ママちゃんはいったのだった。これが、はじまりだった。(浅川じゅん1990『モモタロウ殺人事件』)
- b. キャスリーンはずずしい顔だ。「そもそも、どこかのおろか者が森で迷子になるから、このような初歩的な魔法をやらされるのでは?」「だれのせいだと思っ

¹⁴ 芳賀(1954)は仁田(1991)と違って言表事態めあてのモダリティと発話・伝達のモダリティのどちらか一方でも文が成立するといった立場を取っている。

¹⁵ 前後の文脈が必要なので、ここで挙げる用例は、無活用動詞を含む文のみならず、その前後の文もあわせて提示されることにした。

¹⁶ この用例は、BCCWJからではなく、http://www.huffingtonpost.jp/2018/02/01/flu_a_23350765/によるものである。

のよ！」トリシアは思わず立ち上がっていた。「あんたがうそついて、わたしを森に行かせたんでしょが！」「あらあら、そうだったのですか？このところ、もの忘れがひどくて。…さてと、勉強、勉強。」キャスリーンは無視する。

(南房秀久 2004 『トリシア、ただいま修業中！』)

- c. 健一「じゃ行こう。決まった。金は俺が持つ。そのくらいのこと出来なくて、営業マンていえるか(と立つ)」実「ほんとかよ？」健一「ほんとさ、出発！出発出発！」「え？」「まさか」「無理よ」といいながら立ち上がる一同――。

(山田太一 1991 『ふぞろいの林檎たち』)

- d. 女官たちは手を叩いて大喜びし、これは皇女様が今年中に結婚することになる吉兆だと囃し立てた。結婚？いったいだれと？母がかつてのオスマン帝国の封臣だったたくさんの王族たちと、手紙をやりとりしていることは知っていた。

(ケニーゼ・ムラト著／白須英子訳 2002 『皇女セルマの遺言・上』)

- e. 「停学処分中はこの家から出はならんぞ。いいな？」「もっちりろん、わかってるさ。そんな常識じゃないか」「おまえの常識はときどき狂うからな。念を押しておかんと…」「了解了解」まだ続いている小言を背に、天鳥は拷問部屋を飛び出した。階段を降りて、自分の部屋へ戻る。

(六道慧 1990 『羅刹王』)

- (14) さらに5月1日には、ものすごい数の外国人が韓国船で入国し、各地で捕まるという事件が起きている。JR 新大阪駅付近でバングラデシュ人が見つかったのを皮切りに、大阪市内で四十八人が逮捕。(実著者不明 2000 『蛇頭「密航者飼育」アジト』)

上記の例(11)における下線部の「調査」は、前後の文脈から見ると、「調査した」に言い換えられる。テンス的には「過去」、アスペクト的には「完成相」、モダリティ的には「述べ立て-断定」を表す。仁田(1991:20)によると、「発話・伝達のモダリティは、文の存在様式」であり、文が成立するには、モダリティを必ず伴うわけである。したがって、例(11)以外の例におけるモダリティは、一つ一つ分析しないことにする。例(12)の下線部の「流行」は、「流行している」に言い換えてもよい。テンス的には「非過去」、アスペクト的には「継続相」を表す。

例(13a)～(13d)は、いずれもテンス・アスペクトよりも、発話・伝達モダリティが顕在的である。例(13a)は「ママ」と「チー子」との会話である。「人を誘い、またはせきたてる時に発する語。」(『広辞苑』第6版)という意味を持つ波線の「さあ」は、「勉強しなさい」に言い換えられる下線部の「勉強、勉強」と呼応しており、勉強させようと「ママ」が「チー子」に催促・命令している。「勉強」の繰り返し形式は、「ママ」の「チー子」を促す気持ちの強さを表す。例

(13b)は「キャスリーン」と「トリシア」との会話である。「キャスリーン」は「トリシア」を怒らせてしまい、「勉強しよう」に言い換えられる、自分自身の意志を表す下線部の「勉強、勉強」で喧嘩になりそうな会話を終えようとごまかしている。それまでの話を切り上げ、別の話題

に移る意を表す波線の「さて」と呼応している。ここの「勉強」の繰り返し形式は、キャスリーンが話題を換えその場の空気を和らげようとする意志の強さを表す。例(13c)は「健一」と「実」たちとの会話である。金のことで行くかどうか迷っている皆の気持ちを動かす「健一」は、はじめに自分が金を出すから、「じゃ行こう」という動詞「行く」の勧誘形で皆を誘い掛けた。「実」が確認したところに、勧誘形「出発しよう」に相当する、勧誘を表す下線部の「出発！出発出発！」で相槌を打った。「出発」の連発や感嘆符の使用など、「健一」の勧誘の気持ちの強さを表す。例(13d)における下線部の「結婚？」と波線の「いったいだと？」とは、倒置法で繋がっている。全体としては疑問文をなしており、話者の最も確認したい「結婚するか否か」ということを文頭に置かせている。ここで倒置法を使うことは、話者の信じられない気持ちの強さを示している。波線のト格から見て分かるように、例(13d)の「結婚？」は「結婚するの？」に言い換えられる無活用動詞でしかない。例(13e)における下線部の「了解了解」は応答表現として使用されている。ここの「了解」の繰り返し形式は、「天鳥」の相手の小言を聞きたくない、嫌がる気持ちの強さを表す。

最後の例(14)における「逮捕」は、前後の文脈から見て分かるように、「逮捕された」に言い換えられる。波線の「捕まる」「見つかった」は、形態からしていずれも動詞の能動形であるが、いずれも受動的な意味を有する。「捕まる」は、「(手で)とらえられる。」(『広辞苑』第6版)という意味を表す。「見つかる」は、「みつけられる。人の目にとまる。」(『広辞苑』第6版)という意味を表す。辞書の意味解釈によると、2つの単語がいずれも受動的な意味を有することが分かる。こういった単語を「語彙受動動詞」とでも呼ぼう。「逮捕」の前文脈における「捕まる」「見つかる」はいずれも語彙受動動詞であるため、その前の格助辞はヲではなくガである。明らかに、例(14)における「逮捕」は「逮捕された」という形に言い換えても構わない。

否定を表すには、語彙的手段と文法的手段がある。語彙的手段としては、「非-」「不-」「無-」「未-」のような否定の意味を含む接頭辞が挙げられる。文法的手段としては否定を表す活用語尾「-ない」を使わなければならない。無活用動詞は活用がないため、文法的手段を使用できない。否定を表す接頭辞「不-」と「無-」は、普通無活用動詞と結合しない。接頭辞「非-」と「未-」は無活用動詞と結合できるが、結合された「非公開」や「未完成」のような単語は、村木(2012)の第三形容詞となってしまう、無活用動詞でなくなる。したがって、無活用動詞には、肯否の対立が見られない。動詞の丁寧さは、普通接辞「-ます」及び「-ます」の各活用形「ません」「ました」「ませんでした」で表す。無活用動詞自体は、丁寧さを表すことができないが、文章の基調が丁寧か否かは前後の文脈で判断できる。こういった点から見れば、丁寧さはテンス・アスペクト・モダリティと同様に無活用動詞でも表すことができる。しかし、コーパス調査によると、無活用動詞の述語用法は、普通常体の文章で使用される。この点を考慮に入れば、丁寧さはやはり無活用動詞で表すことが難しい。

3.3 表現上の特色

無活用動詞は、活用語尾を持たないので、活用のある一般動詞より簡潔である。したがって、「新聞記事や履歴書・日記・手記・スローガンなど、その簡潔性が要求されたり、好まれるものに多出する」(鈴木 1972: 178) わけである。早い考察では、例えば波多野 (1950) は、無活用動詞を「名詞状動詞」と名付け、新聞記事に特有な表現であると記述されている。しかし、松井 (1987) の指摘によると、無活用動詞が新聞記事に特有な表現ではないということがわかった。ただし、新聞記事に多く使われていることも事実である。とりわけ、簡潔性の要求が厳しい新聞記事のタイトルでは、活用のある一般動詞よりも、専ら無活用動詞が使用される。前述の通り、先行研究は無活用動詞が書き言葉に使用されるという点で共通している。例 (13) の各用例の示した通り、話し言葉においては使わないこともない。ただし、話し言葉での使用は、発話・伝達モダリティを顕在させる場合が多い。例 (13a) は聞き手のチー子に対する命令を、例 (13b) は話し手のキャスリーン自分自身の意志を、例 (13c) は話し手の健一の勧誘を、例 (13d) は主人公のセルマの疑問を、例 (13e) は天鳥の応答を、それぞれに表す。また、話し言葉における無活用動詞の使用は、例 (13a,b,c,e) のように繰り返し形式が多いことも注意されたいところである。野内 (2005) によると、同一の語句を少なくとも二度以上繰り返し使う反復法は、強調のため或いは文体的効果を狙うためである。3.2 で分析した通り、無活用動詞の繰り返し形式も何かを強調するためである。無活用動詞の表現上の特色をまとめてみると、下記の通りである。

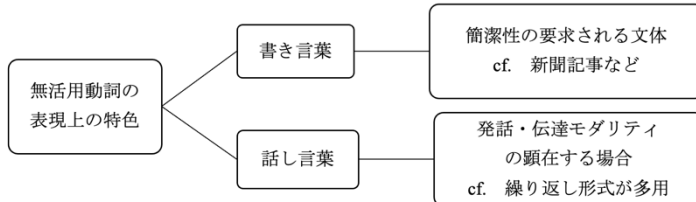


図 1. 無活用動詞の表現上の特色

4. 終わりに

本稿の主たるオリジナリティは下記の 2 点に集約できる。1 点目は、無活用動詞の内包・外延を見直したことである。2 点目は、無活用動詞の形態・統語的特徴を体系的に記述したことである。

表 3. 無活用動詞の形態・統語的特徴

定義	自立用言類複合字音語基が単独で構成される動詞	
形態的特徴	無活用 (活用無し)	
統語的特徴	統語的機能	単独で述語になる (・規定成分になる)。
	文法カテゴリーにおける特徴	①テンス・アスペクト・モダリティを表すことができる、②限られているがヴォイスを表すこともある、③肯否・丁寧さの対立が見られない。

表現上	書き言葉	簡潔性の要求される文体では多用される。
の特色	話し言葉	伝達・発話モダリティの顕在する場合では多用される。

本稿は先行研究と異なり、「無活用」のみに注目するのではなく、それはあくまでも動詞であることを重要視する。無活用動詞は活用を持っていないにもかかわらず、活用のある一般動詞の各活用形の示す文法的意味を全く表すことができないわけでもない。無論、自由に表すことができない文法カテゴリーもある。また、無活用動詞は簡潔性の要求される書き言葉に多用されるのみならず、伝達・発話モダリティの顕在する話し言葉においてもよく使用される。上記の結論は、コーパスにおける実例のデータを詳しく分析できれば、無活用動詞の全体像はより明瞭になろう。実例の抽出・整理及び分析作業は今後の研究に譲りたい。

参考文献

- 池上禎造 (1954) 「漢語の品詞性」『国語国文』23-11:92-101.池上禎造 (1984) に再録.
- 邱根成 (1995) 『無活用動詞』に関する一考察『専修国文』56:99-112.
- 邱根成 (2015) 《日语サ変复合动词研究》浙江工商大学出版社.
- 久保田一充 (2013) 「日本語の出来事名詞とその構文」名古屋大学博士論文.
- 斎藤倫明 (2016) 『語構成の文法的側面についての研究』ひつじ書房.
- 佐藤 豊 (2011) 『を VN だ』構文の出現頻度について『ICU 日本語教育研究』7:55-64.
- 佐藤 豊 (2012) 『を VN だ』構文の出現頻度——Google 検索における再調査——『ICU 日本語教育研究』8 : 35-48.
- 鈴木丹士郎 (1972) 「動詞の問題点」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座3 動詞』pp.133-180.
- 鈴木丹士郎 (1984) 「動詞とは何か」鈴木一彦・林巨樹『研究資料日本文法②用言編(一) 動詞』pp.21-36.明治書院.
- 鈴木智美 (2010) 「ニュース報道における『{動名詞 (VN) / 名詞 (N)} + です』文について——『現地を緊急取材です』『老舗料亭に問題発覚です』——」『留学生日本語教育センター論集』36:57-70.
- 鈴木智美 (2011) 「ブログ等に見られる『{動名詞 (VN) / 名詞 (N)} + です』文について——『～に感謝です』『～をよろしくです』の意味・機能——」『留学生日本語教育センター論集』37:15-28.
- 鈴木智美 (2012) 「ニュース報道およびブログ等に見られる『～です』文の意味・機能——『～を徹底取材です』『～に期待です』『～をよろしくです』——」『東京外国語大学論集』84:341-357.
- 石立珣 (2016) 「日本語動名詞の文法的特徴に関する研究——動名詞の連体用法と述語用法を中心に——」北京外国語大学博士論文.
- 高橋太郎ほか (2005) 『日本語の文法』ひつじ書房.

- 田中伊式 (2012) 「ニュース報道における『名詞+です』表現について～『イチロー選手が電撃移籍です』『尖閣諸島で新たな動きです』～」『放送研究と調査』10:16-29.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会編 (2010) 『現代日本語文法① 第1部 総論 第2部 形態論』くろしお出版.
- 野内良三 (2005) 『日本語修辞辞典』国書刊行会.
- 芳賀 綏 (1954) 「“陳述”とは何もの?」『国語国文』23 (4) :241-255.
- 波多野完治 (1950) 『現代文章心理学』大日本図書.
- 浜田 敦 (1963) 「漢語」『国語国文』32-7:1-15.
- 松井利彦 (1987) 「漢語サ変動詞の表現」山口明徳編『国文法講座 6 時代と文法——現代語』ひつじ書房.pp.181-205.
- 松下大三郎 (1924) 『改選標準日本文法』紀元社.
- 松下大三郎 (1978) 『改選標準日本文法』改訂版 勉誠社.
- 宮田幸一 (2009) 『日本語文法の輪郭——ローマ字による新体系打立ての試み——』復刊.くろしお出版.
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房.
- 森岡健二 (1994) 『日本文法体系論』明治書院.
- 山田孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館.
- 山田孝雄 (1958) 『国語の中に於ける漢語の研究』訂正版 宝文館.